
ほの まら

三相南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほの まら

【Nコード】

N0842D

【作者名】

三相南

【あらすじ】

一人の平凡なOLが市民ランナーの夢であるホノルルマラソンを目指して奮闘するストーリー。笑いあり、涙あり、恋愛あり、仕事や、上司との確執、怪我など様々な障害を乗り越えてスタートラインに立つ。そして夢の舞台で彼女を待っていたドラマとは？

プロローグ（前書き）

大会の名前・地名などは実際のものを使っておりますが、詳細な情報などについては正確ではない部分もあるかもしれませんのでご注意ください。

プロローグ

2007年1月8日 成人の日。鈴木幸子は湘南にある実家のコタツに入りながらテレビをぼんやりと見つめていた。近所のスーパーでレジのパートをしている幸子の母は台所で食器を洗っており、公務員を退職した父は新聞をよみながら向かい側に座っている。兄は2年前に結婚し、実家には居ない。ごくごくありふれた休日の光景だった。幸子は自分の名前を観るにつけ平凡だなあと思う。鈴木という苗字も平凡なら、幸子という名前もありふれている。もう少し目立つような名前は無かったかなあ？と新聞越しに父の顔をみつめた。

名前の由来は演歌歌手の小林幸子から来ているらしい。当時まだヒット曲の無かった小林幸子を市民センターのコンサートで観た父が、その歌の上手さに惹かれて勢いでつけてしまったという。幸子が生まれた時と言えばピンクレディーの絶頂期であったのだから、タレントの名前をつけるなら、未唯^{ミイ}とか恵^{ケイ}とかつけてくれれば、もう少し違った人生だったのでは？と今更ながら思うことがあるが、今となってはもう仕方がない。一方、父は幸子が生まれてから数年後に小林幸子が想い出酒でレコード大賞を取った時には、まるで自分の娘が取ったかのように大喜びだったという。

子供の頃の幸子は、勉強もまずまず、運動もまずまず、友達もそこそこいて、いじめられることも、いじめることもなく、順風満帆に育ってきた。中学ではバスケットボール部に入り、高校ではテニス部に所属したが、これといって目立つ成績は残していない。大学に入り、人並みの恋愛はしてきた。彼氏も出来た。お酒も覚えたし、勉強もした。でも元来、執着心のない幸子には、親友と呼べるような友達は出来なかった。いや一人だけ居た。幼馴染の美香ちゃんだ。

彼女は生まれつき体が弱く、体育の授業は見学ばかり。でも近所に住んでいたので幸子とは仲が良かった。登校するのも一緒。遊ぶ時も一緒。激しい運動のできない美香ちゃんは、幸子が元気に飛び回る姿を自分に映し変えて、体育の時も、部活の時も、じつと眺めていた。小学校から高校まで同じ学校に通ったが大学は別々になってしまった。でも二人の友情は途絶えず、今でも頻繁に会い、休みが会うときは一緒に旅行に行ったりしている。

そういえば今日は成人の日。幸子が成人式を迎えたのは10年前だ。今思えば、大学生だったあの頃は楽しかった。難しいことは考えず、人間関係に悩むことも無く、気楽に過ごせた。成人式には振袖を着て美香ちゃんと一緒に市民センターへ行った。今日から大人だ！大人になったら・・・と色んな夢を語り合っていたのに、就職してからは、責任ばかり背負わされ、先輩と後輩の間に挟まれて、気を使わねばならず、出勤 仕事 帰宅（時々飲み会）という単調な毎日が、悪戯に過ぎていき、なんとなく30歳という区切りの年を迎えてしまった。“夢”と言う漢字に、にんべんがつき、“夢”になってしまったのだ。

今日で正月休みも終わり、明日からまた単調な毎日が始まる。横浜にある自宅を7時に出て、新橋のオフィスまでドアツードアで約1時間。人波に飲み込まれながらの通勤も慣れたし、職場にはソコソコ仲の良い友人もいる。仕事だって決して退屈なものではない。都内某IT関連会社にSEとして就職したので、数々のプロジェクトに関わり、会社や社会に貢献してきたという自負はある。世の中で大勢の人が利用しているクレジットカードのシステムや、インターネットを利用したショッピングシステムだって、その一部は、幸子の関わったプロジェクトが絡んでいるのだ。

しかしながら、プロジェクトを取り仕切るだけの能力がない幸子に

は達成感がない。リーダーの元で支持された事を着実にこなす。それが幸子の役割だった。そのために大学を卒業してから今までの8年間。何かをやり遂げたという実感が湧かないのだ。恋愛からも遠ざかっていた。大学の時に付き合っていた彼氏と5年前に別れてからは、これといった出会いも無くなってしまった。分かれた原因は未だに良く分からない。でもそれを追求しようと言うパワーすら奪われてしまった気がしていた。

このままじゃいけない。何か新しい自分を発見したい。今年こそは・・・と思うものの、その何かが見当たらなかった。湘南にある実家で過ごす毎日はお気楽で、楽しかったが、明日から入社だ！と思うと、気持ちとはほとんど深みに落ちていく気がした。

平凡な名前をつけた父が、突然テレビのチャンネルを変えた瞬間、ふと我に返りテレビを見ると、そこには椰子の木の向こう側に沈むオレンジ色の太陽が映し出されていた。それは幸子にとって見覚えのある景色だった。それは、幼馴染の美香ちゃんと大学の卒業旅行で行ったワイキキの風景だったのだ。番組はホノルルマラソンのドキュメンタリーのようなだった。

ホノルルマラソンとは毎年12月第2日曜日にオアフ島で開催されるフルマラソンの大会で、多い時には3万人もの参加者が集う。日本人の参加者が多く、ハワイで行われているのに約半数は日本人だと言う。制限時間がなく、ハワイの美しい景色の中を走れるので、市民ランナーにとっては夢の舞台とも言える大会だ。ホノルルマラソンのドキュメンタリー番組は毎年、成人の日に放送されていた。根っからのマラソン好き（観るだけだが）である父はこの番組を観るためにチャンネルを合わせたようだ。

幸子は何となくテレビを観ていた。美香ちゃんと訪れたワイキキに

懐かしさを感じて、また行きたいなあと思いながら、漠然とみていた。しかし真つ暗な夜空に花火が打ちあがり、想像を絶する数の人波が一斉に走り出すシーンが映し出されると、何故だか体の中からこみ上げてくるものを感じた。先頭を走る躍動感溢れる黒人ランナーからは何も伝わらなかったが、後続の一般市民ランナーが楽しそうにカメラの前を歩き過ぎていくのには驚きを感じた。走ることは辛いことという意識が幸子にはあった。部活でも体育でも、無理やり走らされるマラソンというものには嫌悪感を抱いていた。それなのにテレビ画面を通じて伝わってくるランナーは実に楽しそうだった。顔にペイントをしている人や、お揃いのユニフォームを着ている人、中には仮装をして走っている人もいた。レースが終盤に差し掛かり、ハワイの暑い日差しが照りつけるようになると、ランナーの表情は一変し、歯を食いしばって必死に走っている場面がたくさん映し出されたが、汗にまみれたその表情はとても輝かしく感じた。ゴールの公園には、ものすごい数の観衆が集まり、ランナー達に大きな声援を送り、ゴールしたランナーはインタビュワーに涙交じりの声で感動を伝えている。番組の最後に映し出された『そこでしか味わえない感動がある』というメッセージを見た瞬間、幸子の体に強烈な電流が走った。

第1話：高揚

2007年1月9日、幸子にとって新年最初の会社日。例年ならば、ひどく落ちていて憂鬱の塊のような、顔をして電車に乗っているのであるが、今年はちよつと違っていた。昨日見たテレビ番組『ホノルルマラソン』が元気の源となり、出口の見えないトンネルに光が差し込んできたような気分だった。通勤電車の中では、目の前の座席が空き、いつもなら、間髪入れずに腰を下ろすところを、ぐつとこらえて、隣に居たおじさんに笑顔で譲った。そしておじさんの会釈ひとつで、なんだか気分がよくなってしまふほど、高揚していた。

オフィスに着き、ひと通り、新年の挨拶を済ませると、幸子はひとつ上の先輩である、白鳥翔子の席へと向かった。翔子は、すらっとした身長で細身の身体。涼しげな顔立ちで、いつも凜とした雰囲気。を醸し出しており、プロジェクトリーダーをさらっとこなす。それでいて、いつも余裕があり、周りへの気配りができるという、幸子にとっては憧れの先輩であった。しかしながら翔子との接点は少なく、普段はあまり喋ることがない間柄であった。

「翔子さん、去年のホノルルマラソンに出場されていましたよね？」
幸子が様子を伺うように話しかけると、突然の問いかけに翔子はあつけにとられた。翔子はランニング、ヨガ、エアロビクス、水泳など身体を動かすこと全般が、趣味なのだが、その中でもホノルルマラソンは、大学の卒業旅行以来、ずっと出場し続けている特別なイベントだった。その特別の思いがあるホノルルマラソンについて、普段あまり話すことがない後輩から、しかも新年早々、突然、質問されたものだから、日頃、冷静な翔子も、一瞬戸惑ったのだった。

「ええ、出場したけど、何か？」

すると幸子は、翔子の返事を待ちきれないほどのスピードで、話し始めた。

「昨日、ホノルルマラソンのテレビ番組を観て感動しちゃったんです。私、何かに挑戦したいとずっと思っていて・・・でもその何かが見つけれず、仕事に追われて、気づいたらもう30歳になっちゃって。そしたら、昨日偶然観た、ホノルルマラソンに参加しているランナー達が、すごく輝いて見えて・・・私もあの仲間に入りたい、涙を流すほどの感動を味わいたいです！」

翔子は、さらに話を続けようとする幸子の唇に、そっと人差し指を当て、笑顔で「今日の帰りに食事でも行きましょう！」と言い、話の続きを遮った。

幸子は嬉しかった。憧れの先輩から食事のお誘いを受けた事もそうだが、何よりも今の気持ちを伝えることができたのが、嬉しかった。

新橋の駅前は、サラリーマンやOLが行き交っていた。それでも、年末の混雑ぶりとは違いどこか年の始まり特有の、しゃきとした雰囲気漂っているように見えた。殊に幸子にとっては、特別な感情があった。ここ何年もの間、新年の抱負など考えたことは無かつたし、初詣に行っても、これといった願い事をせず、ただ賽銭を投げ込むだけだった。でも今年は違う。実家で偶然見た、テレビ番組に感化され、目標を持つことができた。フルマラソンという、全くイメージの湧かないスポーツではあるが、それには、これまで心の中に隠れていた挑戦心をくすぐる、不思議な魅力があったのだ。

会社を出て翔子に連れられて来たのは、これといった特徴のない平凡なお店だった。板で出来た看板には『風』のひと文字が筆字で、書かれていた。店の中に入るとカウンター席が10席、それに4人掛けのテーブルが4つ。お世辞にもお洒落とは言えない店の雰囲気

に洗練された翔子とのギャップを感じ、幸子は少し、がっかりした。
(おしゃれなイタリアンの店なんかを想像していたのに・・・)

カウンターのの中では40代半ばに見える店主が日焼けした顔に白い歯を覗かせ、翔子達を迎え入れた。「いらっしやい！ 翔子ちゃん、あけましておめでとう」

「あけましておめでとうございます。マスター、今日の献立は何ですか？」

翔子が尋ねると、「今日は豚のしょうが焼き定食だよ」と店主は得意げに答えた。

「じゃあ、それを2つ下さい」翔子は幸子に何も聞かずに注文した。幸子は不思議そうに辺りを見回し、「ここはメニューがないのですか？」と尋ねると、翔子がお店の解説を始めた。

この店は、日替わり定食だけのお店で、店主はランナーである事。そして、お客さんの健康を考えたバランスの良い献立を考えてくれていること。それに店主は北海道縦断レースを毎年完走している市民ランナーの中では有名な存在であること。もうしばらくすると、皇居を走り終えたランナー達で賑わうこと。

翔子は普段、会社でみせるクールな感じとは、全く違う、気さくな雰囲気、幸子に優しく話し始めたのだった。

「ホノルルマラソンをテレビで観たのだったわね。それでどう思ったの？」

翔子の問いかけに、「何か良く分からないけど、熱いものを感じたんです。脚を引きずりながら、歩くように前へ進むランナー達が凄く輝いて見えて。それにゴールしたランナーの笑顔がすごく素敵で。うまく言い表せないけど、私にもあんな風に輝くことができるのかな？って思ったら、凄くワクワクしてきちゃって・・・」

勿論、フルマラソンって、そんなに簡単な事じゃないと思うんです。脚だつて痛くなるだろうし、呼吸も苦しいだろうし、でも、完走することができたら、何か違った自分を発見できるんじゃないかって」

翔子は、幸子の話を頷きながら聞き、時折、店主と目を合わせては、微笑みあっていた。

「また一人ランナーが増えたな。おめでとう！」と言って、店主は幸子に握手をもとめた。

幸子とはまどった様子で、店主と握手を交わし、翔子と目を合わせ笑いあった。

この日の食事は楽しかった。普通の豚のしょうが焼きに、お味噌汁とご飯、それから、ひじきの煮物にサラダ。特別なメニューではなかったが、翔子と店主からマラソンの事を、色々聞き、そのひとつひとつが新鮮で、新しいことに挑戦する意欲がムクムクと湧き上がってきた。まずはシューズとウェアを買って、まだ寒いから毛糸の帽子と手袋も。色は何色にしようか？ いつ買おう？ どこで買おう？ 想像するだけで楽しくなってきた。翔子からお店の情報も色々教わった。それにシューズを買うときは、付き合ってくれると言う約束もしてくれた。マラソンを通じて、翔子と親しくなれたのが、より一層、幸子の気持ちを高ぶらせていた。

その次の土曜日、お昼過ぎに、幸子は翔子と神田駅の改札口で待ち合わせをしていた。少し早めについた幸子が、改札口のほうをみつめていると、小型のリュックを背負った翔子が階段を駆け足で下りてくるのが見えた。翔子は、会社で仕事をしている時のスーツ姿とは全く異なり、スポーティーなジャケットを着て、ジーンズを履き、毛糸の帽子を被っていた。ラフな格好ではあるのだが、センス良く着こなされた、その姿で、軽快に走り寄る翔子を見つめていると、最近お腹まわりが、気になり始めた幸子は、とても羨ましく思えた。

（私もいつか、あんな風に・・・）

二人は肩を並べて、目的のお店へ向かった。お店へ到着するまでの間、二人の話題はランニングの事に集中していた。翔子は大学時代に陸上サークルに所属していて、卒業旅行で初めて、フルマラソンを経験。それがホノルルマラソンだったという。翔子はこれまでに出場してきた様々なレースの話を聞かせてくれたが、初めてのホノルルマラソンの事は何故か、あまり詳しく話しながらない様子だった。

目的の店は、こじんまりしたお店で、店内にはランニングシューズの箱がうず高く積まれ、3名の店員がお客さんと向かい合って作業をしていた。翔子が1人の女性店員に挨拶をすると、「翔子さん、いらっしやい。調子はいかがですか？」と気さくに話しかけてきた。その親しげな会話の様子から、翔子がこの、お店の常連であることが感じ取れた。「こちらがお友達？」と聞かれると、「そうよ、今年のホノルルマラソンを目指しているの」と翔子が紹介してくれたので、幸子は会釈して店員と向かい合った。

店員は、手際よく幸子の足型をとり、足の長さや幅を計測した。そして足の形状に見合うシューズを3足選び、試着させ、履き心地の良い1足を選ばせた。どのシューズもふんわりと足を包み込む感じが、これまで履いていたスニーカーとは比べ物にならないくらい履き心地が良かったが、その中から白地にピンクのラインが入ったシューズを選んだ。

「どれもみな良い感じで判断できないので、色で決めちゃいましたけど、良いですか？」と幸子が言くと、店員はにっこりと笑って「それも大事な要素ですから。自分で愛着を持てるデザインのほうが、走るのが、楽しみになりますからね。」と告げた。店員が店長らしき人を呼ぶと、小太りの店長が現れ、幸子の履いているシューズを

チェックし始めた。爪先の余裕度や、フィットしている感じを手で触り、チェックした。そして幸子の顔を見上げて「良い感じですね」と一言伝えた。このシューズに先ほど取った足型から整形したオーダーインソールを装着してくれると言う。完成までには1週間ほど掛かるようで、今すぐにでも走り出したい気分の幸子は、残念がつていたが、「ホノルルは、まだまだ先だから、焦ることはないわよ。来週シューズが完成したら皇居と一緒に走りましょう！」という翔子の言葉に納得したのだった。

シューズの注文を済ませたあとも、二人の買い物は続いた。ランニングウェアに手袋、帽子、サングラス。全てを身につければ、一度も走ったことがない幸子も、一丁前のランナーに変身する。「それにしてもランニングって結構、奥が深いんですね。シューズを選ぶだけでも大変なのに、ウェアなんかも、沢山ありすぎちゃって・・・」幸子の言葉に、頷きながら、「単純に見えるスポーツだからこそ、奥が深いのよ。道具だけでなく色々だね。」言葉に含みを持たせながら翔子は話した。

二人の買い物が終わり、街路灯を見上げると、『東京マラソン2007』と書かれたペナントが吊り下がっていた。それを見た翔子は、ふーっとため息をついた後、口をキュッと結び一瞬、引き締まった顔をしたが、すぐに元に戻り、幸子と人ごみに紛れていった。

第2話：決意

快晴の午後、皇居周辺は、コートを着た大勢の観光客で賑わっていた。その観光客の間を縫うように沢山のランナーが走っている。そのランナーの中に1人の女性がいた。薄手のトレーニングウェアを着て、白いキャップを目深に被り、スポーツサングラスを掛けて、俯きがちに、颯爽と入りぬけていく。足取りは軽く、前を行くランナーを次々に交わして行くが、息の乱れは殆ど無く、白い息を一定のリズムで吐き続けている。皇居桜田門をくぐると彼女は、スピードダウンして、腕時計のストップウォッチを止めた。2段に表示されていたタイムは上段が02:15'42"で下段が00:21'25"。翔子は、時計の数字を眺めて、ひとつ、ふっーと息を吐いた。白鳥翔子は、2月に行われる東京マラソンを目指しており、その練習で皇居周回コースを走っていた。1周5kmの周回コースを6周して、合計タイムが2時間15分42秒。最後の1周は21分25秒であったことを時計が証明していた。

翔子のフルマラソンベストタイムは、2時間52分30秒。今年の東京国際女子マラソンで20位になった時に記録したのだが、あれから2ヶ月、翔子は、再びこの自己記録に挑もうとしている。

桜田門前の広場を、ゆっくりと3往復して、時計台の前へ移動すると、そこには幸子がきよきよと、周りを見回しながら立っていた。「幸子さん！」翔子が呼びかけると、幸子は驚いたように気づき、翔子の存在に気づいた。

「いつもと全然雰囲気が違うから、気づきませんでしたよー！あれっ、もう走っちゃったんですか？」幸子が話しかけると、

「ええ、私の練習はこれでおしまい。これからは、あなたの練習に付き合うわ。」

「翔子さんの練習って、どれだけ走ったんですか？」幸子が興味深そうに聞くと、

「まあ良いから。始めましょ。」と翔子は幸子の問いかけを遮り、ウォーミングアップ用のストレッチを始めた。

入念なストレッチのあと、まずはウォーキングから始めた。着地方法、腕の振り方、視線の位置や姿勢などひとつひとつ丁寧に、翔子は指導していく。20分ほど歩いた後、歩くようなスピードでのジョギングに移行した。まずは3分走って、3分歩く。これの繰り返しで皇居を2周した。距離にして約10km。話をしながらだったので、幸子は、時間が経つのを忘れて、トレーニングに取り組んだ。スピードは遅かったが、微かに感じる風が、頬に当たり、心地よさを感じていた。桜田門に戻った時、幸子は、このまま、どこまででも行けそうな、そんな気持ちになったが、「今日はこれくらいにしておきましょう」という翔子の一言で、この日のトレーニングを終えた。走り終えてクールダウンのストレッチをしていると、幸子は自分の脚が随分と張っていることに気づいた。関節の動きが硬く、歩き方も若干きこちなくなっていた。

「走っている時は全然大丈夫だと思っていたのに・・・」幸子が言う

翔子は「初めは、みんな、そんなものよ。繰り返して続ければ、慣れていくわ。今日は幸子さんの、マラソン記念日だから、『風』でお祝いしましょ。」と微笑みながら語った。

そして、二人は近くにあるトイレで着替えを済ませ、新橋の食堂『風』へ向かって歩き出したのだった。

翌日、幸子がぎこちない足取りで出社すると、同期の小林幸治が呼び止めた。

「サチコ、怪我でもしたのか？」幸治が意地悪そうな笑みをたたえて話しかけると、幸子は、ほっとしてくれとでも言いたげな表情で「怪我なんかしていないわ、ちょっと走ったら筋肉痛になっただけ」とそっけなく言った。小林幸治は入社以来、ずっと同じ部署に配属されている唯一の同僚であった。入社当時、幸治は幸子に想いを寄せていたが、大学時代から付き合っていた彼氏が居るのを知っていたので、その想いは打ち明けることができず、いつしか、二人の間には友情のような気持ちが芽生え始めていた。そのためか、幸子が彼氏と別れたあとも、幸治は幸子に想いを打ち明けられず、気がついたら8年が経過していた。

幸治はからかった時に、ほつぺたをぶつと膨らませて、むくれる幸子の態度がたまらなく好きだった。その態度を見たいが為に、幸子を見つけては、ちょっと意地悪な話しかけ方をしていた。幸子も幸治のそういう接し方が嫌いではなかった。入社当時、10名居た同期も転職や異動で居なくなり、今では幸治と二人きりになってしまった。でも幸子は最後に残った同期が幸治で良かったと思っているし、幸治も同じ思いだった。

いつもとは違い、そっけない態度で歩き去ろうとする幸子に、「何で走ったんだ？ 電車にでも乗り遅れそうになったんか？ それとも子犬にでも追いかけられたか？」と再び、からかうような言葉をかけると、幸子はニヤッと笑って幸治のほうへ向き直り、「私、馬拉ソンを始めたの！ ホノルル馬拉ソンを目指すのよ！」と得意げに話した。

幸治の中に居る幸子は、スポーツとはどうしても結びつかない、ど

ちらかと言えば、どん臭いタイプで、走り出せば躓き、飛び跳ねれば敷居に頭をぶつける、そんな印象を持っていた。その幸子からホノルルマラソンに出場するなんて、想像もつかない言葉を聞いたものだから、幸治はかける言葉を失ってしまった。言葉が見つからずに固まっている幸治に、「なんか文句ある？」と幸子が胸を張って話しかけると、幸治は「お前、ホノルルマラソンって何キロ走るか知ってんのか？」と一歩近づいて、二人は向き合った。

「当然よ！ 42・195kmでしょ」

「42・195kmって簡単にいうけど、東京からどこまでいけるか分かってんのか？」

「そんなの知らないわよ！ でも皇居を8周とちよつとでしょ！」

「でっ、皇居を何周走って、その歩き方になったんだ？」

「2周だけど・・・」

「辞めとけ、辞めとけ。大体オリンピックに出るわけじゃないのに、フルマラソンなんて走って何になるんだ？ お前には、絶対完走なんてできないし、似合わないから辞めとけて。」

話しているうちに、どんどん強い口調になっていく、いつもと違う雰囲気、幸治に圧倒され、返す言葉を失ってしまった幸子は、下を向いて、黙ってしまった。僅かな沈黙の後、幸子が顔を上げると、書類を小脇に抱え颯爽と歩いている翔子の姿が目に入った。

そして次の瞬間、幸子は幸治の顔を睨み「絶対完走するからっ！ 完走したら私の願い事を叶えてもらうからね！」と言い放ち、幸治の足を踏んで、自分の席へと歩みだそうとすると、幸治は「完走できなかつたら、俺の願い事を叶えるんだゾ」と、幸子の襟元をつまんで、言い返した。

幸子は、最初、ホノルルマラソンという舞台に憧れ、憧れの先輩、

翔子と近づき、それに挑戦しようとしている自分に酔っていた。しかし幸治との会話で、それは単なる憧れではなく、はっきりとした目標へと変わった。絶対に完走して、幸治を見返すんだ！という強い決意を誓ったのだった。一方、幸治はランニングに打ち込もうとしている幸子を遠目に眺め、心の中に複雑な思いが湧き上がっているのを感じていた。

第3話：事情（1）

京都の西京極運動公園陸上競技場のトラックは、色とりどりのユニフォームで賑わっていた。その中に苦悶の表情を浮かべて、俯く一人のランナーが居た。水色のランパン、ランシャツを着て、紺色の襷を掛けた彼の姿は、遠めに見ると、スタート前の精神統一をしているようにも見えた。

小林幸治18歳。神奈川県代表校で1区を任された彼は、寒気に身体を震わせ、発熱から来る頭痛に襲われていた。何かを食べれば吐き気に見舞われる為、食欲もなく、立っているだけでも辛い状態だった。異変を感じたのは、前日の入浴後だった。喉にヒリヒリとした違和感を感じ、軽いめまいに見舞われたが、まだこのときは、事の重大さに気づいてはいなかった。翌朝、目が覚めると、天井が回っているような錯覚にとらわれ、身体の節々が痛くなってきた。

中学時代をサッカー部で過ごした幸治は、高校に入って陸上競技部に入学した。当時活躍していた瀬古利彦に憧れ、将来のオリンピック選手を夢見ていた。幸治の入学した陸上部は駅伝の名門チームで、7年連続で県の代表校に選ばれている。高校で優秀な成績を残して、大学に推薦入学して、箱根駅伝を走り、マラソンでオリンピックを目指す。そんな夢を思い描いていた。

1年生の時はあと少しというところで、駅伝メンバーに届かず、2年生の時には県予選で痛めた脚の故障が回復せず、全国大会には出場できなかった。3年生になり、ようやく掴んだチャンスだったのに、よりによって、こんな時に体調を崩すとは・・・

それでも幸治はスタートラインに立つことを決めた。こんな状態で

も、控えの選手には負けない自信があった。師走の寒風、吹きすさぶ中、乾いたピストルの音が鳴り響いた。幸治はこれまでの悔しさを晴らすかのように飛び出した。

全国高校駅伝大会で1区はエース区間とされている。10kmという距離はもつとも長く、ここでの順位が総合成績を左右することは言うまでもない。脚は思っていたよりも快調に動いてくれた。先頭グループに取り付き、競技場をあとにした。瀬古利彦が活躍した、花の1区を快走することが幸治の目標だった。

異変を感じたのは中間点を少し過ぎたあたりだった。5名で形成されていた先頭グループから、外国人留学生の選手が飛び出し、先頭グループが崩れ始めた。幸治は、先頭を行く選手を追いかけようとした。しかし急激なペースアップに身体がついて来れなかった。息があがり、汗の量が急激に増えた。同時に脚の動きが鈍くなり、頭がボーっとし始めた。先頭に行く留学生選手の褐色の肌が遠ざかり、何人かの選手が横をすり抜けていく。「ついていかなば!」と歯を食いしばり、必死に走るが、もはや地面を蹴る感触すら失われつつあった。足は宙を漂うように、ふわふわと浮き、視界がぼんやりとしてきた。コースが歪んで見え始め、冬晴れの景色がセピア色に変色した。そして幸治は、推進力を失い、コースの真ん中に崩れ落ちるように膝をついた。

気がついたとき、幸治は病院のベッドの中に居た。インフルエンザによる発熱と脱水症状で意識を失ってしまったのだった。レースはその場で棄権となり、襷を、次の選手に繋ぐことはできなかった。監督は幸治に優しく「すまん、俺が悪かった。お前の不調に気づいて、やれなかった俺のせいだ。」と謝ったが、幸治には、その優しさが余計に辛かった。チームメイトも幸治を気遣ってくれたが、優しくされれば、されるほど、幸治は深みに落ちていく気がした。

日頃から明るい性格の幸治は、落ち込んでいる姿を見せまいと、チームメイトや監督に接したが、心の中では辛い気持ちで一杯だった。「早く陸上から離れたい。早く高校を卒業したい」願うのは、そればかりだった。それでも幸治の実力を評価してくれる大学はあった。数校から推薦入学の誘いを受けた。しかし幸治は最後まで首を縦には振らなかった。

あれから12年。冬になると思い出す。幸治はこの12年間、走ると言う事を避けて生きてきた。マラソンや駅伝の話題を耳にするのが、嫌で、嫌でたまらなかった。そのマラソンに幸子が挑戦すると言う。他のスポーツであれば、思い切り応援してやれるのに、マラソンだけは・・・

第4話：事情（2）

翔子との初練習から1ヶ月が過ぎた。寒さは厳しさを増し、布団から抜け出すのが、より一層厳しい2月に入ったが、幸子のランニングに対する情熱は、衰えていなかった。

週末には、翔子と一緒に皇居をゆっくりと長く走り、平日、仕事を早く切り上げられた日には、会社帰りに皇居を1周するのが習慣になっていた。最初は3分走ったら、3分歩いていたが、それが5分走って、3分歩くというサイクルに上達し、今では30分程度なら走り続けられるようになってきた。

翔子と接するようになってから、食生活も変わり始め、大好きだったスナック菓子や、インスタント麺は、食べなくなり、間食の回数も減ってきた。僅か1ヶ月の間で、体重も2kg減り、心成しかウエストも引き締まってきたように思えた。

そんなある日、幸子は上司の屋沢栄二に呼ばれ、会議室に入った。屋沢栄二は、50代半ばのベテランSEで、高校を卒業して、この仕事に就き、今に至るわけであるから、30年以上の大ベテランである。SEという職種は、ある時期は30歳寿命説が唱えられるような職種で、多くの技術者が、この年代を境にして転職していくか、出世して管理職へと移行して行くのだが、栄二は、この仕事が心底好きであるため、常に新しい技術を取り入れ、管理職となった今でも、現役SEを続けている仕事人である。

それでいて、若い社員との付き合いも上手く、飲み会などあれば、率先して出席し、とことんまで、若者に付き合おうと言う、誰からも親しまれる上司であった。外見は小太りで色黒。いつも何かを考え

ながら歩いていて、どこか憎めない、気のよいおじさんタイプであった。幸子も栄二の事は大好きで、親子のような接し方をしていた。そんな栄二が何人かの部下を連れて、会議室に入っていた。その中には、幸子がもつとも苦手とする後輩、田島一平も含まれていた。

田島一平は、某有名私立大学の大学院を卒業して、入社したSEで、大学院時代から会社に顔を出し、アルバイトをしていた。IT関連の事に精通し、入社早々、小規模なプロジェクトを任されるなど、会社にとっては、期待の存在であった。

細身の身体で、銀縁のめがねをかけ、一点をみつめて歩く様を見るにつけ、幸子はまるで爬虫類のようだと思った。また、パソコンに向かって、薄ら笑いを浮かべた顔で、キーボードを叩く姿を見ると鳥肌が立った。何が嫌いと言う訳ではないのだが、生理的に受け付けなかったのだ。「彼とは一緒に仕事をしたくない。」それが幸子の願いであったが、その願いは叶えられない状況になりつつあった。

会議室に集ったのは、全部で6名。屋沢栄二を筆頭に、田島一平、鈴木幸子、同期の小林幸治と、残りの二人は今年の新入社員だった。色黒で、お腹の突き出た、栄二がワイシャツの袖をめくりながら立ち上がり、新しく始まるプロジェクトの概要を説明し始めた。

「来月から始まる新プロジェクトは、大手外資系金融機関のシステム構築で、納期は11月末。メンバーはここに集まってもらった、私を除く5名で、プロジェクトリーダーは一平。詳細については、来週の水曜日、客先にて打ち合わせを行うので、その場で・・・以上」と必要最低限の事を言い放つと、栄二は椅子にどっぷりと腰を掛け、背もたれに身体を預けた。

幸子はこの知らせを聞き、2つの不安を感じた。1つ目は納期が1月末と言うこと。ホノルルマラソンは12月の第2日曜日。納期どおりに終われば問題ないが、もしも延びてしまったらという不安そして、もう1つはプロジェクトリーダーが田島一平と言うことだ。「彼とは一緒の仕事をしたくない。」その一平と同じプロジェクトに組み込まれた拳句、後輩である彼の指揮下で、仕事をしなければならぬと思ったなら、ぞつとしてきた。あの爬虫類のような目と向き合って、仕事をするなんて考えられない。何とか逃れる術はないかと、出席者の顔を見渡した。

居た！ 幸治がいた。幸治は一平よりも先輩で、プロジェクトリーダーの経験もある。幸子は意を決して、栄二に質問した。「何故プロジェクトリーダーは田島君なのでしょう？ 小林君のほうが経験豊富だし、年上なので適任だと思うのですが・・・」この問いかけに栄二はふーっと、ひとため息をつき、「どっちでも良いんだけどねえ。クライアントの意向なんだよ」。幸治、悪いな。」と苦笑いを浮かべて言うと、幸治は「別に僕は構いませんよ。」とあっさりと言い放った。

幸子の望みは絶たれた。そして、妙に突き刺さる視線を感じた。視線の方を向くと、一平がニヤリと笑い、幸子を見据えていた。「宜しくお願いしますね。」一平の言葉に幸子は凍りつくような、感覚をおぼえた。それはまるで、蛇に睨まれた蛙のようでもあった。

会議室を出た時の幸子は視線が定まらぬほど、ショックを受けていた。これから10ヶ月以上、あの爬虫類男と仕事をしなければいけないのかと思うと、憂鬱で仕方がなかった。一平がリーダーで、その下に幸子と幸治。そしてその下に新入社員という構図を頭の中で思い描くと、これからどんな苦難が待ち受けているのか、容易に想像できたからであった。

ホノルルマラソンという輝く舞台を目指して、歩みだしたのに、今
おかれている現実が重く、のしかかってきていた。

第4話：事情（2）（後書き）

筆者、ホノルルマラソン出場の為暫く連載を中断いたします。
12月20日以降、再開する予定です。

第5話：事情（3）

午後9時を過ぎた食堂『風』は、トレーニングウェア姿のランナーで賑わっていた。今日の調子を語る者、次のレースを何にするか相談している者。シューズの履き心地を話題にする者。話す内容は様々であったが、どれもみなランニングに関わることであった。

そんな中、カウンター席では、皇居のジョギングを終えた、幸子と翔子が、焼き魚定食を食べようとしていた。

「本当に駄目なんですよー もう気配を感じるだけで、鳥肌が立っちゃって」

幸子は、興奮気味に言った。

「そうねえ、好き嫌いがあるのは仕方ないわね。でも仕事だと割り切って付き合わなければいけないこともあるんじゃない？」

翔子は、醤油に手を伸ばしながら喋った。

「だって本当に気味が悪いんですよー。ニヤケタ顔でPCに向かって、時々下をペロつと出して上唇を舐める仕草なんて、トカゲか蛇ですよ。」

幸子は、翔子を見据えて箸すら持たずに語りかけた。

「面白い表現ねえ・・・ でも良く観察しているわねえ」

翔子は、納豆を混ぜながら答えた。

「翔子さん、真剣に聞いてくださいよー 折角、ホノルルマラソンという楽しみが、出来たのに、これじゃあテンション下がっちゃいますよ。」

幸子がさがるような口調で言うと、翔子は幸子を見据えて、少し強い口調で語り始めた。

「幸子さん、仕事とプライベートを一緒にしては駄目よ！ しつかりとけじめをつけなければ！ それから今おかれている状況から逃げたら駄目、きちんと向き合って取り組みれば、変わってくると思う

わよ。」そう言うと、焼き魚を口へ運んだ。

幸子は、仕事の悩みを翔子に、打ち明けたのだが、翔子は真剣に聞き入れてくれなかった。

それが不満で、幸子は、ほっぺたをぷつと膨らませて、ご飯を目一杯、口に放り込んだ。それを見た翔子は、「良くかんで食べた方が良いわよ。」と小さな声で話し、食事を続けた。

食事が終わると、翔子は大勢のランナーに囲まれ、ランニング談義に加えられていった。幸子は1人取り残されたようで、孤独感を感じていた。

翔子は会社でも、プライベートでも人気者。いつも誰かに囲まれている。それに比べて私は・・・？ そんな寂しさを感じながら翔子の話し声に耳を傾けると、『東京マラソン』という言葉が聞こえてきた。マラソンと言う言葉に引き寄せられ、聞き耳を立てると、翔子が東京マラソンに出場するらしいと言う事が分かった。2ヶ月前にホノルルマラソンを走り、その1ヶ月前には東京国際女子マラソン。この4ヶ月の間に3度もフルマラソンを走ってしまう翔子が、とてつもなく凄い人に思え、そう思うと自分が凄く小さく見える幸子だった。

幸子は突然、席を立ち、翔子の方へ歩み寄ると「翔子さん、東京マラソン走るんですか？」と唐突に話しかけた。翔子は仲間達との会話を遮られた事に、戸惑いながら、幸子の方を向き、「ええ、走るわよ。」と答えると、幸子は「私、そんなの初めて聞きました。」と不機嫌そうな表情を露にして詰め寄った。「幸子さんゴメンナさいね。黙っていて。でもね、私にとってフルマラソンを走ると言うことは、そんなに特別な事ではないのよ。別に隠しておくつもりはなかったの。もし良かったらレースを観に来てくれない？ どこかで私の走る姿を見守って応援してくれないかしら」そう言って幸

子の目を見つめると、翔子の機嫌はすっかり治り、東京マラソンの応援に行くことを約束していた。

食堂『風』からの帰り道、1人になった幸子は、今日起きた事をいろいろと考えた。田島一平とプロジェクトが一緒になってしまったこと。それが嫌でプロジェクトリーダーを幸治に替えられないかと提案したこと。それが聞き入れられず一平に睨まれたこと。翔子に仕事の不満を打ち明けたが、同情してもらえなかったこと。翔子に不機嫌な態度を取ったこと。それに対して、優しく翔子が接してくれたこと。思い起こすと、今日、自分の取った行動の全てが情けなく思えてきた。そして、翔子の言った「今おかれている状況から逃げたら駄目！」という一言が妙に胸に響いた。

第5話：東京マラソン

東京マラソン

2007年2月18日朝8時、新宿の東京都庁前は、大勢の人でごった返していた。

みぞれ混じりの冷たい雨が降りしきり、こんな天気の日曜日は、いつもなら傘をさした人が時折、行きかう程度で閑散としているのだが、この日は特別だった。

近年のランニングブームにより、都心部でのマンモスマラソンを望む声は大きかったが、交通規制などの問題で、なかなか実現されなかった。先進国の主要都市で、マラソン大会が無いのは東京だけ。

そんな叫びも届かず、叶わぬ夢と化していたイベントが、この日、実現されようとしていた。生憎の天候にも関わらず、スタートの号砲を待ちわびるランナーからは、湯気が立つほどの熱気が感じられた。

そんななか、翔子はいつものように目深に帽子を被り、薄手のトレイニングウェアをランニングシャツの上から纏い、ロング丈のスパッツに手袋、そしてアームウォーマーという出で立ちで黙々とウォーミングアップを行っていた。スタート地点で時折起こる歓声など、まるで聞こえないかのように、自分の世界に入り込んでいた。時間にして20分くらいであろうか、ウォーミングアップが終わると、トレイニングウェアを荷物にしまいこみ、ゴール搬送用の受付に預けた。

スタート30分前になると、スタート位置に着くようアナウンスが繰り返されるようになった。翔子は冷たい雨が降る中、静かにスタートラインに付いた。そして胸元に輝くロケットを右手でそっと握

り締め、目を瞑って、額にかざした。その瞬間、これまで静かだった心の中がざわめき始め、堪えきれない感情がこみ上げてきて、一筋の涙がこぼれ落ちた。

幸子は、沿道で背伸びをするように翔子を探していた。本当はスタート前に会い、言葉を交わしたかったのだが、想像以上の混雑で、なかなか前へ進むことが出来ず、遅れてしまい、会うことができずにいた。スタートラインについている大勢の選手の中から翔子を探し出すのは容易なことではないと思ったが、諦めずに探していると、背の高い男性ランナーの中に、薄い水色のランシャツを来た女性が目に入った。凜とした雰囲気を漂わせて、立つ、その姿は間違いなく翔子だった。翔子に声を掛けようとさらに近づくと、今までに見たことの無い翔子の姿がそこにあった。

翔子の様子は明らかにいつもとは違っていた。下を俯き、手袋をはめた右手で涙を拭くような仕草は、今までに見たことの無い光景だった。間もなく始まる大レースの感動などではない。明らかに何か悲しみを抱えている。そんな雰囲気を感じ取れた。翔子に何があったのか？ 声を掛けたかったが、周りの人を近づけない雰囲気を醸し出しており、結局、幸子は声を掛けることができなかった。程なくカウントダウンが始まり、スタートのピストルが鳴り響いた。東京で行われるマンモスマラソンの歴史的瞬間が訪れていたが、幸子には翔子の涙が気になり、周りの盛り上がりなど感じ取ることではできなかった。幸子は見えてはいけないうるものを見てしまったような気がしていた。

新宿の都庁前は、大歓声が沸いていた。この日を待ちわびていたランナーが一斉に動き出すと、それは水かさが増した川のようにもあつた。多くのランナーは、沿道に手を振り、笑顔を振りまきながらスタートラインを超えていった。都知事に向かって、感謝の言葉を

送るランナーも居た。冷たい雨が降る、悪コンディションにも関わらず、どのランナーも楽しげであった。それまで俯いていた翔子は、冷たい雨が落ちてくる空を見上げ、雨で涙を洗い流すと、大きな流れにのって、走り去っていった。この瞬間、翔子はいつもの姿に戻り、颯爽と都心の大通りを駆け抜けていったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0842d/>

ほの まら

2010年10月9日14時36分発行